

この宝を

Ⅱコリント4:6～7

●導入

(おはようございます。)改めて、教会のみなさんに感謝を申し上げたいと思います。ゴールデンウィーク青年キャンプの為に祈り下さり、本当にありがとうございました。

ご存じのとおり、コロナ禍が始まってすでに2年以上の月日が流れました。この間、私たちが学んだことは、普通のことか決して普通ではない、あたりまえではないという事です。

人間にとって食べること、眠ること、そしていっしょ過ごすこと。これは、間違いなく人生の大切な一部であります。土浦めぐみ教会の青年たちは、そんな人生の営みを毎年、ゴールデンウィークのキャンプを通して実感し、また味わってきました。

寝食を共にし、共に過ごし、共に主を見上げる。そんな時間を共有できるキャンプが、いかに祝福に満ちたものであるのか。昨年に続いて今年もキャンプを通して神様からの恵みをたくさんいただいて帰ってきました。

今日はその恵みを証しすると共に、みなさんと御言葉の恵みをも分かち合うことができたなと思っています。それではまず聖書を読んでいきましょう。

●聖書 Ⅱコリント 4:6～7

4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。

4:7 私たちは、この宝を土の器の中に入れていますが、それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

コリント人への手紙、第二をお読みしました。パウロが宣教し、伝道し、そして、教会が生み出された町、コリント。みなさんもご存じのように、このコリント教会には、様々な問題が存在していました。それゆえにパウロはこの教会を訪問したり、何度となく手紙を書いてアドバイスをする必要に迫られたのです。

新約聖書には、そんなコリント教会に宛てられた2通の書簡が収められています。第一の手紙では分派、不道德、偶像にささげた肉や御霊の賜物に関する混乱など様々な問題があったことが記されています。

さらに第二の手紙においては、また別の事柄が問題になっていたことが分かります。今日お読みした箇所では「私たちはこの宝を土の器の中に入れていたのです」とパウロは言いました。

私たちは今日、パウロのこの言葉と共にコリント第二の手紙に込められたメッセージに耳を傾けていきたいと思えます。

●パウロの使徒性

まず、第二コリントの主要なテーマ、主題を押さえておきたいと思えます。この手紙で取りあげられている主題は、パウロの使徒性にありました。使徒としての性質、性格に関する事柄を使徒性と言います。

パウロが使徒と呼ばれるにふさわしいのかどうか、使徒としての性質、資質にかなっているのかどうか。それがコリントの教会では大きな問題にされていたということです。

たとえば私は日本同盟基督教団の正教師であり、土浦めぐみ教会の牧師という立場にあるものです。けれども井上聡の牧師性に疑いがあるとしたら、これは大きな問題と言えるかもしれません。

井上聡という人は、本当に牧師なのか？牧師にふさわしい資質や能力があるのか？そんな目を向けられたとしたら、これは結構、大きなことだと言えるでしょう。

パウロという人はいわゆる12弟子の一人ではありません。イエス・キリストの公生涯において弟子として直接従っていたわけではありません。しかし、パウロは救われた後に使徒とされた人、使徒の役割を担う人となったわけです。

パウロ自身もこう言っています

「私は使徒の中で最も小さい者であり、使徒と呼ばれる価値さえも有していない」
けれどもそんなパウロが神の召しに従い、神の選びによって使徒とされた。

しかし、そんなパウロの使徒性について疑い、否定するような声が、
コリントの教会で聴かれるようになったというのです。
パウロが伝道し、開拓し、そして生み出されたコリントの教会。

でもコリントの教会には先ほど申し上げたように様々な問題があり、教会が揺れていた
そこへユダヤ主義的なクリスチャンたちが入り込んで、混乱に拍車がかかっていった。

ユダヤ主義というのは、ユダヤ教的な教えや実践を重んじる保守的なクリスチャンたち
のことを指す言葉です。

そんなユダヤ主義者たちを中心にパウロを疑う声が挙がった。パウロの使徒性を疑い
パウロの教えや指導を否定するような人々が存在していた。そんな疑いはらし問題を
解決するために書かれたのが、このコリント第二の手紙であったとされています。

そのようなわけでこのコリント第二の手紙にはパウロ自身に関する記述がひときわ多く
記されています。パウロが、個人的な経験や思いを述べる。そして、自分が使徒として
召されたことを証しする、弁明する。そんな内容が多く見られる手紙です。

それゆえに、この手紙で重要なキーワードとなるのは、自己吟味という言葉なのです。

● 自己吟味

Ⅱコリント13:5

あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。

パウロの使徒性が問題とされた。

それゆえパウロは自分の信仰と使徒としての立場を確認し、チェックし、吟味すること
が求められた。求められたのはパウロだけではありません。
ユダヤ主義者もコリント教会のメンバーも、みな自己吟味を迫られている。

自分が信仰に生きているのかどうか、自分を生かしているものは、何であるのか？
自分を試し、チェックし、吟味すること。
そのことが誰にとっても求められる大切な事として扱われているのです。

青年キャンプは信仰を振り返る時でもあります。自分の信仰は今どうなっているのか？
自分は信仰に生きているのかどうか？そんな自己吟味が求められる。

救われた、洗礼を受けた。それだけでいいのか？礼拝を守っている、奉仕もしている。
それが本当に自分の信仰となっているのか？年に一度のキャンプは、そのようにして
自分を振り返り、自己吟味をする機会でもあるのです。

3日間、キャンプ場で仲間達と寝食を共にしながら、主を見上げ、集中してみことばに
聴きます。同時に信仰を振り返り、自分を吟味する時を持った上で再び日常の生活へ
と戻っていくのです。

パウロもまた自分が救われ、異邦人の使徒として召されたことを振り返る、自己吟味の
時を持ちました。この第二コリントの手紙を通して、パウロの自己吟味、信仰の確認が
なされていることが伝わってきます。

同時にパウロはあなたがたもまた自分の信仰をもう一度、見つめなさい。
自分の信仰の在り方を確認し、点検し、自己吟味をなさいと勧めるのです。

パウロが示す自己吟味のための言葉を見ていきましょう。

Ⅱコリント 4:6

「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知
識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。

●創造のみわざ

ここでパウロは明らかに神の創造のみわざを私たちに指し示そうとしています。闇の中
に光を創造した神。言葉をもって世界を造られた神。それはすべての被造物の始まり、
いのちの始まりを意味する神のおおいなるみわざでありました。

その創造のみわざに匹敵するような事が、私たちの上にもたらされました。キリストにあってなされる新しい創造、すなわちそれは、永遠のいのちに至る神の選びと救いのみわざです。

私たちの心は、かつて闇におおわれていました。
罪の支配のゆえに、霊的に死んでいました。

しかし、イエス・キリストによって新しい創造がなされました。
キリストの光に照らされ、私たちが新しい命に生かされるようになったのです。

その結果、キリストの御顔にある神の栄光が私たちの心を照らしてくださったのです。
それは、神を知る知識が輝き、増し加えられるためだとパウロは、言うのです。

信仰の自己吟味がなされるために必要なものは光です。神が私たちの心を照らし出してくださる光。神の栄光を知るための光。キリストによって輝く知識が求められる。

自分とは、一体どういう人間なのだろう？自分の信仰はいまどうなっているのだろう？大切なことは自分で自分を決めつけることでもなく、誰かの意見や考えに振り回されることでもありません。

神が創造された光、キリストによってもたらされた輝き。
その光によって照らし出された自分を見る事。神の栄光を知る知識を輝かせる事。
そのようにして示された自分の姿、自分の信仰を正直に見つめることにあるのです。

毎年ゴールデンウィーク青年キャンプでは、キャンプのテーマ、主題がつけられます。
今年のキャンプのテーマは次のようなものでした。

テーマ「じしん探しの旅～あなたのじしん(自信・自身)はどこから？～」

青年とは何か？それは重要な問いかけです。スイスの精神科医ポール・トゥルニエは人生の四季という本の中で、人生を4つの段階に分けました。幼年期から始まって青年期、壮年期、老年期とそれぞれを春夏秋冬の季節に例えてあらわしました。

精神分析家で心理学者のエリック・エリクソンは、さらに人生を8つの段階に分けて、人間を理解しようとしていました。エリクソンの分類によれば、13歳～64歳までが青年期だと言うのです。もちろん、この青年期がさらに細かく分けられるわけですが。

何歳から何歳までが、青年なのか？それには、いろいろな見方、考え方があります。生まれた子どもが幼年期を過ごし、やがて思春期を迎える。思春期、青年期を経て、少しずつ大人になっていく。成熟へと向かっていく。

青年期は、人が成熟へと向かっていく過程、プロセスにあります。様々な経験をする、いろんなライフイベントを体験していく。そして少しずつ成熟へと導かれていく。

そこで問われるのは、自信です。自分が自分である事、自分というものがこれで良いのだという確信。そのような自分に自信を持つと言う事が試される。それが青年期。

めぐみ教会では18歳、高校を卒業した時から青年会のメンバーとなることができます。18歳から経験するライフイベントには、重要なものが目白押しです。大学に進学する、或いは就職する、家族から離れての一人暮らしを始める、自立する。

やがて結婚したり、子どもが生まれたり、社会では責任ある立場に立ち、様々な困難を経験していく。そこで試されるのは、自分が何者であるのかということです。何ができるのかと同時に自分は一体何者であるのか、ということが試されるのです。

心理学の用語にセルフエスティーム、という言葉があります。日本語に訳すと自尊心 とか自己肯定感と呼ばれる言葉です。よく日本の子どもや若者は自己肯定感が低いと言われたりします。

日本の社会では身内の者を引き下げて表現することがあります。家族とか仲間を紹介する時に、肯定するのではなく否定的な言葉が使われる。「いやあ、お宅のお子さんはずばらしいですね」と言われると、「いえいえ、そんなことないんですよ」と否定してしまう。

ほめられる事よりも否定されたり、叱られたり、ダメ出しされることの方が多いのです。それもあってか、日本の子どもたち、若者たちは、自己肯定感が低く、自分に自信を持っていないことが多いと言われたりするのです。

キャンプの話に戻りますが、

「じしん探しの旅～あなたのじしん(自信・自身)はどこから?～」
というテーマでキャンプが行われました。

信仰を持って生きていく青年たち。でも信仰があるから問題がないというのではない。いや、むしろ信仰ゆえに悩み、困惑し、葛藤することも多いのでしょう。だからこそ自分が問われる。自分に自信を持っているのかが問われるのです。

今回のキャンプでも集中して御言葉に聴き、神様と向き合い、自分と向き合う。そんな時間を参加者たちはそれぞれに持つ事が出来たと思います。そこで再確認させられたことは自分についての自信はどこからもたらされるのか、ということです。

自分が自分であるということの根拠、自分が自信をもって、信仰者として生きていって大丈夫という理由。それが問われたのであり、そのための自己吟味がなされたのです

●この宝を

Ⅱコリント 4:7

私たちは、この宝を土の器の中に入れていますが。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

小説家の三浦綾子さんが「この土の器をも」という題の自伝的小説を書かれました。私たちはみな、土の器である。心も体も弱く、もろく、傷つきやすい存在である。そしてパウロは、そんな土の器に宝が入れられていると言うのです。

結局のところ私達が自尊心を持ち、自己肯定感を持ち、自分が自分であるという自信を抱くのは、自分の内側に何を入れているのか、持っているのかということにあります

自分の信仰を吟味し、信仰が試されるときに、信仰者としての土台となっているもの、信仰者としての確かさをもたらすもの。それは、弱くもろく傷つきやすい私という器の中に宝が入れているということにかかっているのです。

どんな宝なのか？何が私にとっての宝であるのか？パウロがこの宝と指しているものそれは、4:6にある「キリストの御顔にある神の栄光を知る知識」のことを指しています。この知識が私に与えられた宝であり、私の中で輝く宝であるということです。

子どもたちがよく歌う賛美に「ぼくのたからもの」という曲があります。その歌詞の中でこう歌われています。「ぼくのたからものはイエスさまを知ったこと、イエスさまと一緒に生きること、私のたからものはイエスさまを知ったこと、イエスさまと一緒に生きること」

この宝。それは、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識である。この宝、それは、イエスさまを知ったこと、イエスさまと一緒に生きること。この宝。それはキリストご自身

キリストという宝のゆえに、土の器に入れられたキリストという宝のゆえに、私たちは、輝くのです。キリストと出会い、キリストを知り、キリストを信じ、キリストとともに生きているがゆえに、私は私であり、私は神に生かされる信仰者である。

パウロは4:6でこの宝は、計り知れない力であると言っています。私たちの内にあって働く力、それは生きる力であり、信じる力です。キリストという宝のゆえに、私の内には生ける神の力が働いている。その力に生かされていく。

そして、それは私たちから出たものではない、とパウロは言うのです。三浦綾子さんが言うように私たちは確かに土の器です。弱く、もろく、傷つきやすい存在です。それにも関わらず私たちは輝いている、力を発揮することができる。

それはすべてキリストのゆえなのです。私たちから出た力ではなく、私達の内に生きて働くキリストのゆえなのです。キリストの計り知れない力のゆえなのです。

めぐみ教会の青年たちは、輝いています。また、すばらしい力を発揮します。それは、キャンプという非日常においても、また普通の何気ない日常の中でもそうなのです。

光輝き、力強く歩む青年たち。でも、彼らは同時に弱く、もろく、傷つきやすい存在です。いろんなことでつまずき、いろんなことで悩みます。ぶつかることもある、力を落として、うずくまることもある。

でもそんな彼らが何度でも立ち上がり、チャレンジし、前に進めるのはキリストのゆえ、キリストという宝をもっているがゆえなのです。そして、そんな青年たちは教会の宝です。神の宝なのです。

今晚のオープン礼拝では、青年たちが神の宝であるというメッセージをします。キリストが宝であると同時に自分自身もまた宝の民とされている。神にとってかけがえのない大切な宝とされているということ。

東京基督教大学では、よく「学生は宝である」と言われたりします。「宝のような学生、宝をとともに育ててください」と繰り返し言われるのです。しかし、私は思います。宝は、東京基督教大学の学生だけではない。

キリストという宝を持つ青年たちが、そして、キリストと共に生きる私たち一人一人が、神の宝であり、神のかけがえのない宝の民であるということ。パウロが言うように、この確信はすべてキリストのゆえにあると言えるのです。

青年キャンプは終わりました。キャンプから再び日常へと戻り、いつもの生活が始まります。自己吟味の時を終えて、青年たちは生活の場、信仰の現場へと再び遣わされていくのです。

私の願いは青年たちが、イエス・キリストという宝をこれからもしっかりと持ち続けることです。そして私の祈りは宝であるキリストと青年たちが共に歩み続けることです。教会の宝である青年たちを覚えて、みなさんにもぜひお祈りしていただければと思います。

●祈り

Ⅱコリント4:7

私たちは、この宝を土の器の中に入れていますが、それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

神様、今年もゴールデンウィーク青年キャンプが無事に行われたことを感謝します。
教会のみなさんに祈られて、送り出されて、キャンプに参加した青年一人一人を覚えて
祈ります。

青年たちは慌ただしい日常の生活から離れ、3日間という時間を与えられ、
神様と向き合い、御言葉と向き合い、自分と向き合うための機会を持つ事ができました
自分の信仰をふりかえり、自己吟味をする時を持つ事ができました
私たちは誰もが土の器です。心身に弱さをまとい、もろく、傷つきやすい土の器です
しかし、主よ、あなたはその土の器に宝を入れてくださいました。

キリストというかけがえのない宝を入れてくださいました。

私たちは神の栄光を知る知識を与えられ、神の輝く光に照らされて、
計り知れない神の力を体験する者とされました。

どうかこの事実を忘れることなく、神様が与えてくださった確かな約束から離れる事なく
これからも主イエスと共に歩む歩みへと導いてください。

土浦めぐみ教会にたくさんの青年が与えられていることを感謝します。

どうか、これからも青年たちが生き生きと輝く教会、
青年たちが安らぎと憩いを得ることのできる教会、
青年たちが教会を愛し、教会に仕える教会となっていくことができますように

私たちの大牧者であられる主、
青年の主、教会の主、わたしたちの主
イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン

● 祝祷

私たちの宝となってくださった主イエス・キリストの恵み、
私たちに神を知る知識を与えられた父なる神の愛、
計り知れない力をもって私たちを導かれる聖霊なる神の助けが
教会の宝である青年一人一人の上に
また今、神を礼拝する一人一人の上に
豊かに限りなくありますように。アーメン